

吉田遺跡第 I 地区 A 区の未報告図面について

田畑 直彦

1 はじめに

当館は平成4年度に、吉田構内への統合移転時に発掘調査が行われた吉田遺跡第 I 区 A 区の報告を行った¹⁾。その際、遺構図に関しては断面図は存在したものの、平面図が全て行方不明であったため、断面図は基本層序の提示にとどめ、遺物中心の報告を行わざるを得なかった。その後、平成9年4月に至り、教育学部地理学準備室から統合移転時の発掘調査の記録類が新たに発見され、この中に吉田遺跡第 I 地区 A 区の平面図等が含まれていた。この発見により、第 I 地区 A 区の調査区とおおよその位置が明らかになった。また、埋蔵文化財資料館で保管している図面類を整理した際、第 III 地区の図面が収納されている袋に第 I

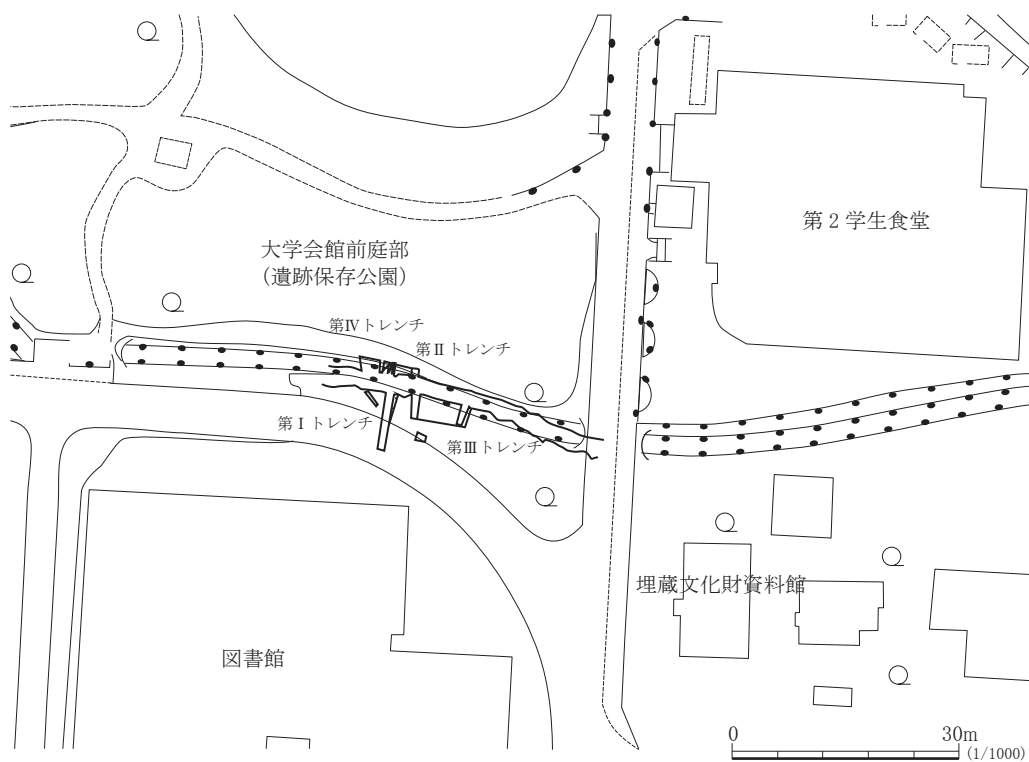


Fig.26 調査区位置図

地区 A 区の「不整形のピット」の土器出土状況図が含まれていることが確認された。以上の新たな発見を受け、以下では、これらの図面について追加報告を行いたい。

2 平面図

原図は縮尺 1/80 の平板図である。図の下に「S 41 7 16 吉田第 I 遺跡」と記載されており、右側には赤字で「緊急調査」と書き込まれている。図に地区名の記載はないが、溝に直交して設けられた第 I ～ IV トレンチまでの記載があり、IV トレンチの中央付近には「不整形のピット」とみられる遺構の平面形が記されている。「不整形のピット」付近には十字状に線が描かれている。これが何を意味するかは不明であるが、恐らく実測上の基準線と推測される。また、溝についての記載はないが、この平面図は後述する断面図と対応していることから、大学会館前庭部南側の水路であることが分かる。以上からこの平面図は第 I 地区 A 区のもので断定できる。なお、第 I 地区 A 区は第 V トレンチも存在したとされるが、記載がないため詳細は不明である。ただし、第 I トレンチの西側、第 II トレンチの南側には記載のないトレンチがあり、いずれかか該当する可能性が高い。また、第 I 地区南側には L 字状の範囲が破線で描かれているが、その形状と現状から、構内道路予定箇所を描いたものと推測される。

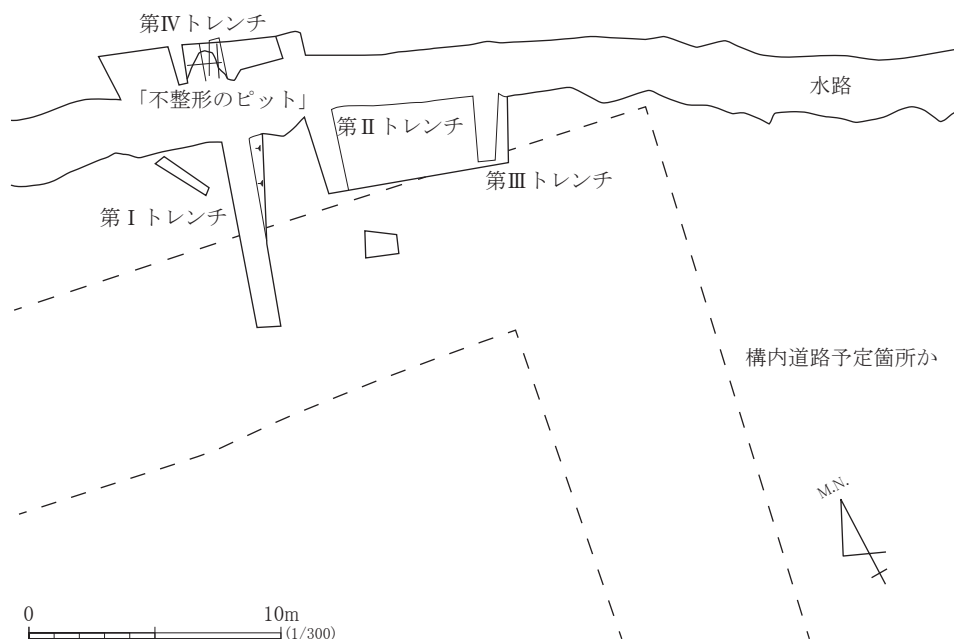


Fig.27 第 I 地区 A 区平面図

第Ⅰ地区A区の位置については、第Ⅰ地区A区全景写真(PL.16(1))と第Ⅰ地区E区調査前全景写真²⁾を比較すると、構内道路が南側へ緩やかに曲がる付近に調査区が位置することがわかる。以上から、Fig.26で示したように第Ⅰ地区A区のおおよその位置は図書館の北東側であることが判明した。

3 断面図

現在、埋蔵文化財資料館では第Ⅰトレンチから第Ⅴトレンチの断面図及び、排水溝(現水路)南壁の断面図を保管している。今回は、調査区のおおよその位置が判明した、第Ⅰ～Ⅳトレンチの断面図と水路南壁の断面図について報告する。なお、第Ⅱトレンチ東壁断面図、第Ⅲトレンチ東壁断面図の正確な位置は不明である。第Ⅳトレンチ東壁断面図も位置は不明であるが、「不整形のピット」とみられる落ち込みがみられる。

基本層序については、前回の報告³⁾に基づき、以下のように整理した。第Ⅰ層：耕土 層厚約14～51cm、第Ⅱ層：茶褐色土 土師器や須恵器を包含する(包含層Ⅰ) 層厚約20～59cm、第Ⅲ-1層：黒色粘質土 弥生土器を包含する(包含層Ⅱ-1) 層厚約9～50cm、第Ⅲ-2層：黒色砂質土 弥生土器を包含する(包含層Ⅱ-2) 層厚約11～74cm、第Ⅳ層：灰青色砂質土 弥生土器を包含する(包含層Ⅲ) 層厚約6～62cm、Ⅴ-1層：黄褐色砂礫(包含層か)、Ⅴ-2層：黄褐色粘質土(地山)、Ⅴ-3層：青灰色粘質土(地山)

包含層については、現在も水路として名残をとどめる谷の埋土と考えられる。また、Ⅴ-1層については、近年の図書館改修工事及び環境整備工事に伴う本発掘⁴⁾から、谷埋土である可能性が高い。断面図には標高の記載がないため詳細は知り得ないが、第Ⅰトレンチ西壁断面図では、Ⅴ-1層が第Ⅰトレンチ水路南側で約60cm落ち込み、南端部では約35cm上昇する。また、水路南壁断面図では、第Ⅰトレンチ西側が一段高く、そこから東西に向かって落ち込んでおり、以下の堆積が複雑であったことがうかがえる。また、第Ⅰトレンチ西壁断面図をみると、「不整形のピット」埋土のうち上層はⅢ-1層、下層はⅢ-1層と同一とされていることから「不整形のピット」は谷の肩部であり、そこに土器を集中的に廃棄したものであった可能性が高い。第Ⅳトレンチ東壁断面図にみられるややオーバーストックする柱穴状の落ち込みは護岸用の杭もしくは自然木の樹根等の可能性が考えられよう。

4 「不整形のピット」土器出土状況図

「不整形のピット」出土土器については、第Ⅰ地区A区の報告を担当した豆谷和之氏に

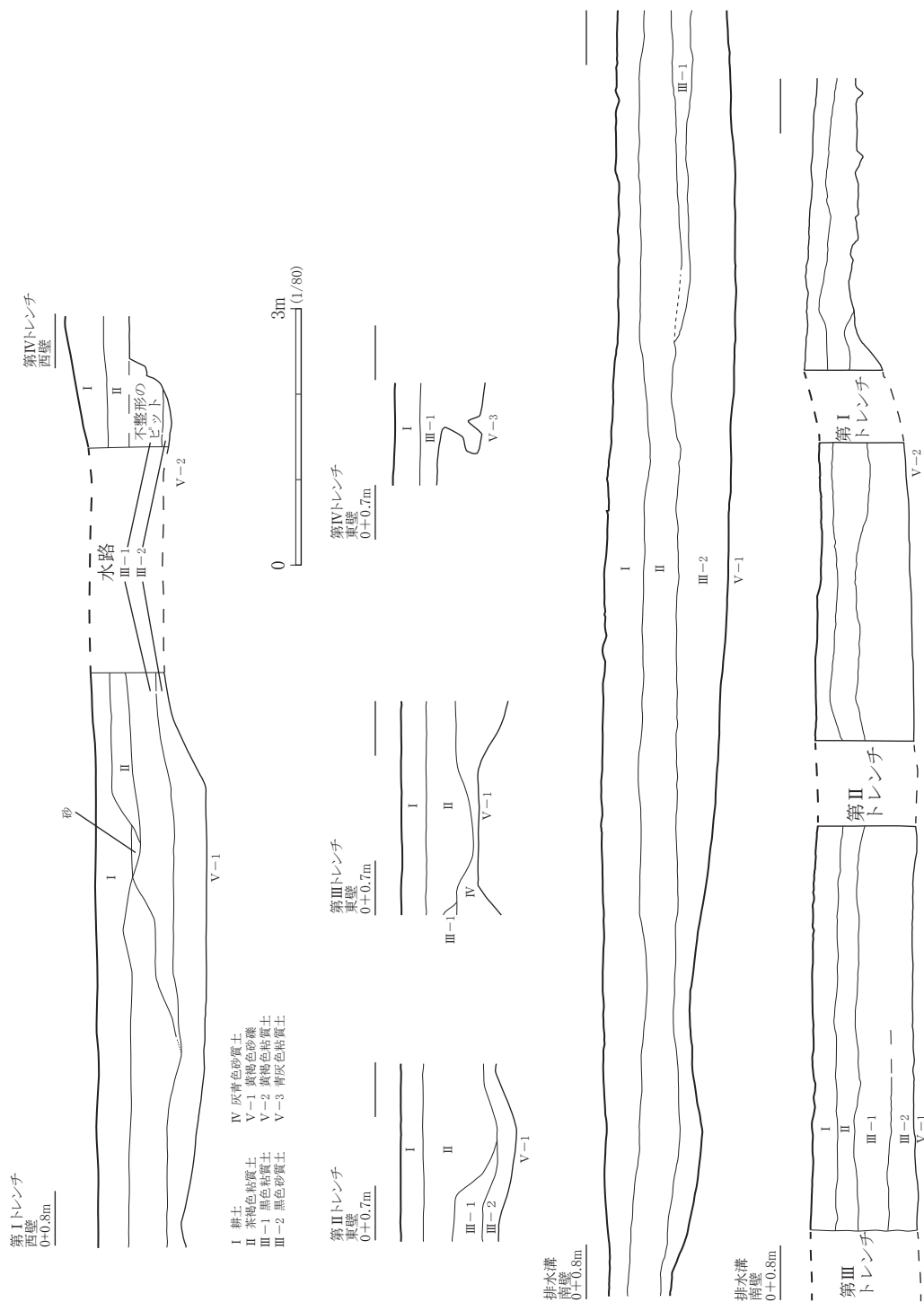


Fig.28 第 I 地区A区断面図

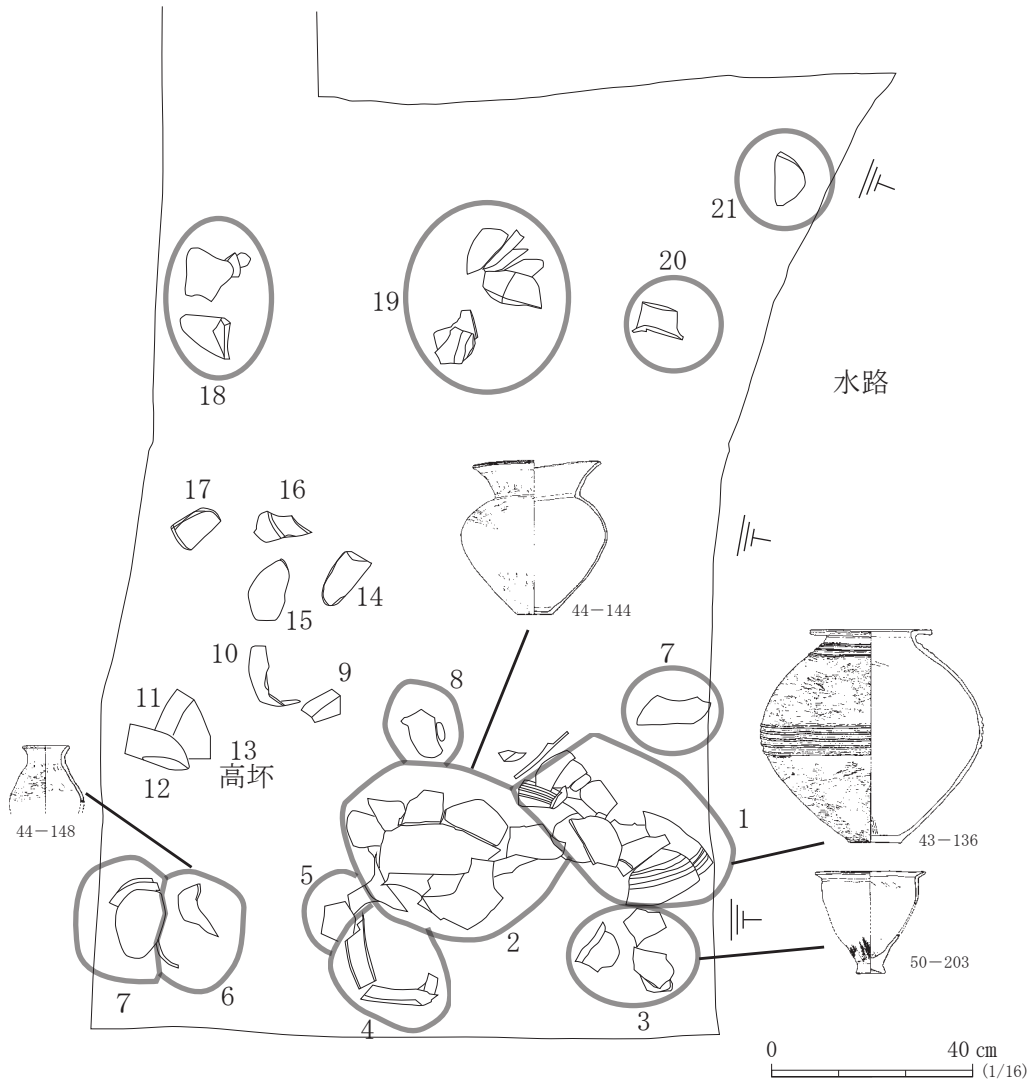


Fig.29 「不整形のピット」土器出土状況図

よって詳細に検討されている。その検討の際示された出土状況図については、出土状況写真⁵⁾をトレースしたものと推測される。今回報告する出土状況図は、冒頭で述べたように、第Ⅲ地区の図面が入った袋に収納されていたものである。この図面には、「Ⅳトレンチ平面図 1/10」と記載されており、一部について土器破片の形状が概ね一致するため、「不整形のピット」土器出土状況図と断定できた。恐らく出土状況撮影後に若干の土器を取り上げた後に作成されたものであろう。また、水路との位置関係からFig. 29の左側が概ね北側になることも判明した。Fig. 29をみると、土器には取り上げ番号と思われる番号が付され

ており、破片が集中する箇所は同一個体とおぼしきまとまりで番号が付されていた。番号は 1～21 までである。Fig. 29 の 7、8、12 を結ぶ線から上は出土状況写真には写っていない。しかし、3 から 21 までの直線距離は約 1.8m で、Fig. 27 の「不整形のピット」とみられる平面形と概ね一致することから、1～21 は「不整形のピット」出土土器である可能性が高い。これらの番号と報告された土器の注記⁶⁾とを比較してみたい。1 次資料の土器の注記を比較したところ、44-144 は「S41.7.15 吉田 第 I トレンチ A 4 トレンチ②」と注記されていることから、この取り上げ番号が付された可能性が高いことが判明した。しかし、他の 3 点については記載がなかった。一方 2 次資料のうち、167 には「吉田 第 I トレンチ A 4 トレンチ②」と注記され、3 次資料のうち、231 には「S41.7.15 吉田第 I 地区 A 区 4 トレンチ-2」の注記がみられたことから、この 2 点については、144 の下から出土した可能性が考えられる。

5 おわりに

以上、第 I 地区 A 区の未報告図面について報告を行った。前回報告の「不整形のピット」については、図面を検討した結果、谷の肩部に土器を集中的に廃棄したものであった可能性が高いと結論づけた。また、前回報告の、不整形のピット出土土器以外の遺物は、調査区の図面を見る限り、谷埋土から出土したものとみられる。これらは大学会館前庭部付近に存在した集落から廃棄されたものと推測でき、今後の調査による再検証が待たれる。

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田遺跡第 I 地区 A 区の調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報 X I』、1993年）
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田遺跡第 I 地区 E 区の調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報 X II』、1994年）
- 3) 前掲注 1) 文献
- 4) 山口大学埋蔵文化財資料館「図書館改修工事及び環境整備（図書館周辺道路迂回）工事に伴う本発掘調査」（『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成24年度—』、2016年）
- 5) 豆谷和之「吉田遺跡第 I 地区 A 区出土の弥生時代中期後半の土器について」（『山口大学構内遺跡調査研究年報 X I』、1993年）
- 6) 前掲注 1) 文献

付篇 吉田遺跡第I地区A区の未報告図面について



(1) 第I地区A区全景 (南西から)



(2) 第I地区A区調査風景 (北西から)



(3) 第I地区A区「不整形のピット」検出状況 (北から)



(4) 第I地区A区「不整形のピット」土器出土状況 (西から)